

## 研究

# 育児期における父親の親性<sup>おやせい</sup>と 母親の育児負担感に関する研究

森永裕美子<sup>1)</sup>, 難波 峰子<sup>2)</sup>, 二宮 一枝<sup>3)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究は、3歳6か月の子どもをもつ父親の親性、つまり“子どもを養育する過程で役割や意識を獲得していくことによってたらされる個人の人格的特性”を明らかにし、父親の親性が、母親の育児サポートとなっているという母親の認知を介して母親の育児負担感に影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。

対象は3歳6か月の子どもをもつ父親・母親で、親性検討項目から父親の親性因子を抽出した。次に父親の親性が母親の育児サポート認知に影響し、その母親のサポート認知が母親の育児負担感の緩和に影響する因果関係モデルの検証を行った。

結果、父親の親性は【夫婦の関係性（5項目）】、【父親としての自覚（4項目）】、【児への親愛性（2項目）】の3因子で、因果関係モデルの検証により、父親の親性が母親の育児サポート認知を介して母親の育児負担感を緩和することが明らかとなった。

Key words : 父親の親性, 父親の自覚, 夫婦の関係性, 母親の育児サポート認知, 母親の育児負担感

## I. 緒 言

近年、父親の育児参加が重視され、“父親も育児する時代”が定着しつつある。しかし育児が母親の役割だという根強い認識もあり、育児の80%以上を担う母親がいずれの年代においても70%前後である<sup>1)</sup>。父親の多くも、「3歳までは母親が育児に専念すべき」を肯定する者が約8割を占めている報告がある<sup>2)</sup>。このような状況の中で母親による不適切な養育や虐待事例件数が増加している実態からみても、母親の育児負担感やサポート体制の不備があり<sup>3,4)</sup>、育児負担感の緩和は未だ重要な課題である。

母親の育児負担感に関しては、育児不安の尺度が開

発され<sup>5)</sup>、母親の育児不安や育児負担感の緩和のための効果的な支援として、ソーシャルサポート<sup>6)</sup>、父親の育児への理解の必要性<sup>7)</sup>、母親に対する父親からの精神的（情緒的）サポート、直接的（手段的）サポート<sup>8,9)</sup>（以下、育児サポート）などが明らかとなっている。

そして父親からの育児サポートは、母親の自己効力感、育児への満足感、精神的健康度を上げ<sup>6,8,9~11)</sup>、さらに育児サポートを得ているという母親の肯定的認知<sup>12)</sup>や、良好な夫婦関係が<sup>8,12,13)</sup>母親の育児負担感の緩和に重要とされている。

しかし父親は育児参加していると感じているにもかかわらず、4割弱の母親は、「父親の育児参加に満足はしていない」という実態<sup>14)</sup>があり、父親と母親の認

Clarifying How Fatherhood Influences the Mother's Childcare Stress

Yumiko MORINAGA, Mineko NANBA, Kazue NINOMIYA

1) 元岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉科学専攻（保健師）

2) 元岡山県立大学大学院保健福祉学研究科（研究職）

3) 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科（研究職）

別刷請求先：森永裕美子 国立保健医療科学院 〒351-0104 埼玉県和光市南2丁目3-6

Tel : 048-458-6231 Fax : 048-458-6714

[2639]

受付 14. 5.20

採用 15. 4.21

識にはギャップが生じている。

一方、育児サポートを提供する父親に関する研究では、父親の育児参加が母親の発達<sup>15)</sup>・子どもの社会性発達<sup>16)</sup>や夫婦関係<sup>17,18)</sup>などに影響をもたらす要因の一つとして間接的に取り上げられてきた。また、父親の育児参加の促進要因<sup>19)</sup>、父親の子どもに対する愛着形成<sup>20)</sup>、父親の親としての成長・発達への影響<sup>16,18,21)</sup>、父親の親性獲得過程についても明らかになっている<sup>22)</sup>。そして父親の親性の構成概念には議論の余地を残しながらも、父親の親性の下位概念が母親の育児負担感の緩和に関連するとされている<sup>23)</sup>。

しかし、母親の育児負担感に関する先行研究の対象は、生後間もないもの<sup>4)</sup>や1歳6か月児に焦点をあてたもの<sup>24,25)</sup>、保育所を対象とした1～5歳と幅の広いもの<sup>10)</sup>がほとんどであり、3歳頃に焦点をあてたものはない。3歳頃になると社会性の発達が著しく、人間形成の基礎となる大切な時期であること、3歳児健康診査という総合的に診査し相談支援が可能なくみがあることから、3歳6か月時に焦点をあて、父親の親性や母親の育児負担感について明らかにする意義は大きい。

以上のことから、先行研究では、父親の親性の獲得が、母親の育児負担感の緩和に関連し<sup>23)</sup>、母親の育児サポート認知があれば母親の育児負担感が緩和されること<sup>6,8,9-11)</sup>がそれぞれで明らかになっているが、母親の育児負担感と父親の親性および母親の育児サポート認知の関連を総合的に見たものはない。Lazarusらのストレス理論<sup>26)</sup>によると、母親自身の対処行動として肯定的な方向への感情・情動の変化(母親の父親に対する肯定的評価)をもたらすことで育児へのストレス反応を緩衝でき<sup>27)</sup>、育児負担感を強く感じないと考えられる。つまり父親からの育児サポートを母親がどのように認知するかによって、母親の育児負担感の緩和は影響される可能性が推測できる。

そこで3歳6か月の子どもをもつ父親の親性が、母親の育児サポート認知を介して母親の育児負担感に影響を及ぼす一連のモデルを措定し、このモデルを検証することにより、母親の育児負担感を緩和するための具体的助言内容の示唆が得られる可能性があると考えた。

したがって本研究では、父親の特性として父親が持つ親性を明らかにし、父親の親性が母親の育児サポート認知を介して母親の育児負担感に影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

## 用語の定義

○親性とは、親になることを「子どもをもち養育していく過程で役割や意識を獲得していくこと」と捉え<sup>28)</sup>、親になることによってもたらされる個人の人格的特性であるとした。

○育児負担感とは、母親が子どもに対して抱くネガティブな感情や家事・育児に伴う母親自身の活動制限や重荷と捉える感情とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

K市(人口約48万人)の市民で、1歳6か月時点で了解が得られ、調査期間中(2008年7～8月)に3歳児健康診査(3歳6か月児)対象児をもつ父親・母親の293組を対象とした。

### 2. 調査方法

2006年8～11月の1歳6か月児健康診査時に、2年後の3歳6か月児時点でのアンケート協力可能と回答した父親・母親293組に調査票・返信用封筒を同封・配布し、回収は研究者宛の返信用封筒での郵送による回収とした。

### 3. 調査内容

#### 1) 対象者の属性

父親・母親の年齢、職業、子どもの出生順位、子どもの数とした。

#### 2) 父親の親性

及川<sup>28)</sup>の「親性発達尺度」(6因子40項目)と、岩田<sup>29)</sup>の父親役割への適応における「ストレス測定尺度」(5因子27項目)を参考に、市町村の母子保健業務を理解し、保健師資格を持つ複数の研究者との検討により23項目を選定した。この親性検討項目を、「全くそう思わない;0点」、「あまりそう思わない;1点」、「まあそう思う;2点」、「非常にそう思う;3点」と得点化し、得点が高いほど親性が高いものとした。

#### 3) 母親の育児負担感

中嶋ら<sup>30)</sup>の「母親の育児負担感尺度」(以下、母親の育児負担感)を用いた。これは、「子どもの世話のためはかなり自由が制限されていると感じることがある」、「子どもとの関わりで腹をたてることがある」など8項目で、母親の児に対するネガティブな感情(「否定的感情認知4項目 Y1～4」)と育児に伴う母親自

身の社会的活動の制限に関連した内容（「社会的活動制限の認知4項目 Y5～8」）が測定でき、信頼性・妥当性が確認されている。この尺度は、「全くない；0点」～「いつもある；4点」の5件法で、得点が高いほど母親の育児負担感が高いことを示す。本研究における内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  信頼係数は、0.84であった。

#### 4) 父親の育児サポートに関する母親の認知

中嶋ら<sup>11)</sup>の「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」（以下、母親の育児サポート認知）を用いた。これは、「育児で疲れたり悩んだりしているときに励ましてくれる」、「オムツの替えや着替え、トイレの世話をしてくれる」等10項目で、父親の精神的サポート（4項目 Z1～4）・手技的サポート（4項目 Z5～8）・情報提供的サポート（2項目 Z9～10）に対する母親の認知を、「とても期待できる；2点」～「期待できない；0点」の3件法とし、得点が高いほど母親の育児サポート認知がなされていることを示す。本研究における内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  信頼係数は、0.88であった。

#### 4. 分析方法

基礎統計を検討し、父親の親性検討項目23項目の因子分析を行い、因子数と各項目が属する因子の決定には、固有値の変動状況と因子の解釈可能性、因子負荷量を参考にした。因子負荷量は、0.35以下の項目を除外するものとした<sup>31)</sup>。

因子分析によって得られた因子は、保健師資格を有する複数の研究者で検討して項目内容から判断できる因子名を命名し（以下、父親の親性因子）、その後確認的因子分析を行った。次に中嶋らの尺度である「母親の育児負担感」および「母親の育児サポート認知」について、確認的因子分析を行ったうえで、父親の親性因子と「母親の育児負担感」および「母親の育児サポート認知」との関連について因果関係モデルを指定し、共分散構造分析によるパス解析を行いモデルの検証を行った。

統計解析ソフトは SPSS21.0forWindows および Amos21.0を用いた。

#### 5. 倫理的配慮

調査は無記名の自記式とした。回答はあくまでも対象者の意思決定を尊重し、拒否する権利を有し、拒否

した場合の不利益は被らないこと、守秘義務を遵守すること、目的外使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした（平成20年7月31日岡山県立大学倫理委員会受付番号91）。

### Ⅲ. 結 果

対象の父親・母親293組に調査票を配布した後、102組の返送があった（回収率34.8%）。欠損値のあるものを除いた有効回答92組（父親母親各92人）を分析対象とした。

#### 1. 対象者の属性

父親の年齢は、31～35歳が43人（46.7%）で最も多く、平均年齢35.4歳（SD ±3.8）であった。父親の職業は、製造業が最も多く30人（32.6%）であった。

母親の年齢は、31～35歳が44人（47.8%）で最も多く、平均年齢33.9歳（SD ±3.6）であり、母親の職業は、専業主婦が41人（44.6%）で、何らかの仕事を持つ者が51人（55.4%）であった。調査時の3歳6か月児の出生順位は、第1子43人（46.7%）、第2子40人（43.5%）で、子どもの数は、平均2.1人（SD ±0.685）であった。

#### 2. 父親の親性

父親の親性尺度23項目を主因子法（Promax 回転）で5因子が抽出され、さらに「説明された分散の合計」および初期解におけるスクリープロットと固有値を参考に、分析を繰り返し<sup>31)</sup>負荷量が低値であるなど、不適切な12項目が除外され、残った11項目から最終的に3因子が抽出された（3因子の累積寄与率52.95%）。第1因子を「夫婦の関係性（5項目）」、第2因子を「父親としての自覚（4項目）」、第3因子を「児への親愛性（2項目）」と命名した（表1）。

3因子モデルの妥当性については、内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  信頼係数が、第1因子（夫婦の関係性）0.81、第2因子（父親としての自覚）0.80、第3因子（児への親愛性）0.77であり、内的整合性に問題がない尺度と判断し、確認的因子分析を行った。このモデルの説明力の程度を示す適合度指標 RMSEA = .059, AGFI = .850, GFI = .907, CFI = .962であり、妥当であるモデルとの結果を得た。

表1 「父親の親性」の因子構造（3因子11項目）

項 目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子「夫婦の関係性」 Cronbach's $\alpha = 0.81$			
X13 子どもが生まれてから夫婦間にもめごとの機会が増えた	.754	-.129	.018
X11 妻が私に何を期待しているのかわからず、イライラすることがある	.748	-.095	-.022
X14 妻の悩みを聞くのは負担である	.708	.105	.029
X12 育児についての妻からの期待は私には負担である	.619	.113	-.106
X8 夫婦間でのコミュニケーションは取れていると思う	.431	.111	.224
第2因子「父親としての自覚」 Cronbach's $\alpha = 0.80$			
X19 父親としての責任を感じる	-.127	.792	-.002
X9 子どもが生まれて妻の成長を感じる	.075	.780	-.209
X20 子どものよき父親になりたいと思う	.077	.594	.100
X7 子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった	-.036	.575	.310
第3因子「児への親愛性」 Cronbach's $\alpha = 0.77$			
X1 私は子どもへの愛情が深いと思う	.005	-.102	.823
X2 私は父親であることを楽しんでいる	-.015	.037	.797

## 親性検討項目23項目から削除した項目

23項目の相関をみて、天井効果、フロア効果のあるものを除外したうえで、主因子法（Promax 回転）で5因子抽出。「説明された分散の合計」および初期解におけるスクリープロットと固有値を参考に分析を繰り返し、最終的に3因子が抽出された。3因子説明率50.02%（負荷量0.35以下の低値のものを除外）。

- X3 子どもの成長が楽しみである
- X4 私は子どもの生活リズムに合わせていると思う
- X5 私は自分を犠牲にしていると思う
- X6 子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなり、さびしい
- X10 子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う
- X15 子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので疲れ気味である
- X16 家事の手伝いは負担である
- X17 仕事への意欲が高まった
- X18 子どもが生まれてから私は忍耐強くなったと思う
- X21 子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする
- X22 イライラするとつい子どもにあたってしまう
- X23 子どもが泣いていても、何を求めているかわからず困る

### 3. 父親の親性と母親の育児サポート認知を介した母親の育児負担感との関係

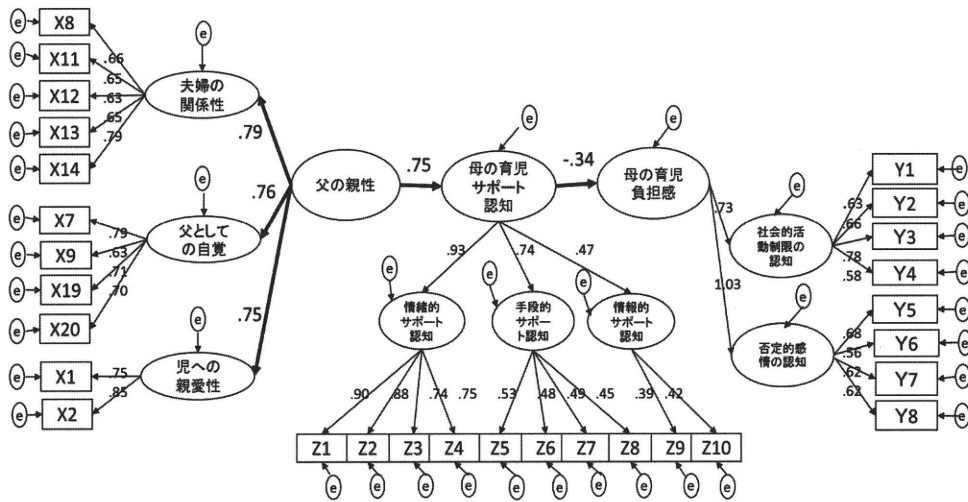
父親の親性が母親の育児サポート認知を介した母親の育児負担感への影響について、共分散構造分析で検討した結果、「夫婦の関係性」、「父親としての自覚」、「児への親愛性」の3因子からなる父親の親性の得点が高まるほど、母親が育児サポート認知をすることができ母親の育児負担感は軽減されるという結果を得た。パス係数に着目すると、父親の親性から母親の育児サポート認知に向かうパス係数は0.75、母親の育児サポート認知から母親の育児負担感に向かうパス係数は-0.34で統計学的に有意な水準にあった。このモデルのデータに対する適合度は、RMSEA = .064, AGFI = .692, GFI = .739, CFI = .888であり、妥当なモデルとの結果を得た（図）。

## IV. 考 察

3歳6か月児をもつ父親母親92人を対象とし、母親の育児負担感の緩和に、父親の親性が母親の育児サポート認知を介して影響を及ぼすことを測定したモデルの検証を行った結果、育児期の父親の親性が、「夫婦の関係性」、「父親としての自覚」、「児への親愛性」の3因子からなること、そして父親の親性は、母親の育児サポート認知を介して母親の育児負担感に影響を及ぼすことが明らかになった。

### 1. 対象者

父親の平均年齢は35.4歳、職業を製造業とする者が多く、母親の平均年齢は33.9歳で専業主婦が約4割、有職者が約5割であり、これはK市全体と比較しても同様の結果を示していた<sup>32)</sup>。母親の年齢および出生順位の傾向は、全国調査と比較してもほぼ同様であっ



RMSEA = .064, AGFI = .692, GFI = .739, CFI = .888

図 父親の親性と母親の育児サポート認知を介した母親の育児負担感の関係 (標準化係数)

注1) 図中の線は統計学的に有意なパスを示し、本研究の目的に必要なパスを太線で示した。

注2) 図の数字はパス係数を示し、 $p < .05$ で有意であることを示す。

注3) 図中の © は、誤差変数を示す。

表2 父親の親性, 母親の育児サポート認知, 母親の育児負担感の平均

		得点範囲	平均	標準偏差
父親	父親の親性	0~33	23.6	7.6
母親	母親の育児サポート認知	0~20	11.4	6.9
	母親の育児負担感	0~32	9.9	8.1

た<sup>33)</sup>。また、母親の育児サポート認知および育児負担感、その尺度を使用した先行研究<sup>11,29)</sup>と比較しても平均値が0.5~0.8程度の差であることから、同様の結果が得られたと判断でき、比較的母親の育児サポート認知が高く、育児負担感の低い対象であった(表2)。この理由として、本研究は1歳6か月児時点、父親・母親を対象とした2年後(3歳6か月児時点)の調査承諾が得られた父親を対象としたので、育児への関心が高く、夫婦間のコミュニケーションも良好であるからではないかと考えられる。

## 2. 父親の親性尺度

3歳6か月児をもつ父親の親性を測る尺度として、「夫婦の関係性」、「父親としての自覚」、「児への親愛性」という3つの因子が抽出できた。

第1因子の「夫婦の関係性」については、父親の積極的な育児参加により夫婦関係の質を向上させると言われている<sup>18)</sup>。しかし、多くの場合、実際の子育て期には、男性としても社会における役割も増大する時期にあり、実際の育児行動量は意気込みに比べて低下

し<sup>18)</sup>、積極的な育児参加に至っていない。つまり、父親は育児参加したいと思っても、家庭外の役割重視により家庭内役割を犠牲にすることもやむを得ず<sup>34)</sup>、母親は育児負担が自分だけにかかることへのストレスや、父親に対する不満を感じてしまい、良好な夫婦関係は望めないおそれがある。育児に関する否定的な感情が蓄積される前に、夫婦双方がお互いの役割分担の領域についてよく話し合い、合意することが必要であり、夫婦間のコンセンサスづくりが重要となる<sup>18)</sup>。夫婦関係を良好に保つことは、父親自身の精神的負担や家事育児の負担感を軽減し<sup>35)</sup>、夫婦関係の満足度が父親の発達にも関係するとされており<sup>15)</sup>、本研究結果でも父親の親性の下位概念として、「夫婦の関係性」が示されたことは、先行研究とも同様の結果であり、夫婦の良好な関係性は父親を育て、親性を高めることに関連していると考えられた。

次に第2因子の「父親としての自覚」については、父親の家事・育児等への具体的な関わりが自身の成長発達と大きく関係しているため<sup>21)</sup>、育児の経験によって父親として世話役割や稼ぎ手役割を担うことを受け入れることと関係する。父親として家族のことを思うようになるが、社会的役割も担わざるを得ない。このような状況で思うように育児参加ができない葛藤を経験し、何らかの犠牲や我慢を伴い、父親に人間的な成長の認識と、親としての自覚がもたらされると考えられる。これは、大橋ら<sup>36)</sup>の研究結果と同様で、親性の

因子として「父親としての自覚」は妥当と考えられる。

第3因子の「児への親愛性」については次のように考える。父親の育児経験は子どもへの慈しみという養護性を育てると言われており<sup>24)</sup>、児と接する時間が長いほど、その中で児から何らかの反応が返ってくる過程を繰り返し、父親自身が関わり方への満足感や充実感を得ることで児への愛情が深まり<sup>37)</sup>、親意識を高めるのである<sup>28)</sup>。母親は育児の過程で児への親愛性を示す父親に対し、母親は共に育児をしていると肯定的に評価でき、一層夫婦間の信頼関係が高まると考えられ、これも先行研究の父親としての自覚と児への愛着は相互に関連しているという結果<sup>38)</sup>を支持したと言える。

以上のように、「夫婦の関係性」や「父親としての自覚」、「児への親愛性」が相互に関連し、父親の親性得点は高くなると考えられ、これら3つの因子は、父親の親性として妥当と考えられる。

### 3. 父親の親性と母親の育児サポート認知、母親の育児負担感との関連について

母親の育児負担感が、父親からの育児サポートで緩和されることはすでに先行研究で明らかにされている<sup>8,9)</sup>。しかし、本研究において父親の親性が高まり、母親が育児サポート認知をすることで、母親の育児負担感の緩和に影響を及ぼすことを想定したモデルが確認できたことから、父の親性が高まることに加えて母親が育児サポートを認知するということが母親の育児負担感の緩和には大変重要であるということが考えられる。

母親が父親を肯定的に認知することが、母親の育児負担感の軽減に関連している<sup>6,39)</sup>ことを踏まえると、父親自身がどれほど頑張って育児参加をし、育児サポートをしていると思うとも、母親が父親から“育児サポートを得ている”と“認知”しなければ、母親の育児負担感は軽減されないと推察できる。これは、ストレス認知理論<sup>26)</sup>によるところの育児負担感をストレスとした時、母親の肯定的評価により、母親自身の対処行動として、「父親は育児をよくやってくれる」、「父親も一緒に子育てしてくれている」と捉えることができ、肯定的な方向への感情・情動の変化をもたらし、育児負担感を強く感じないと考えられる。そして、先行研究で明らかになっている母親自身の自己効力感の高さ<sup>6)</sup>、夫婦間の関係性が良好であること<sup>17,18)</sup>に加えて、本研究で明らかにした父親の親性の下位概念の父

親としての自覚の強さや父親の児への愛情が深いという父親の親性の得点が高いことを、母親が“父親の親性が高まっている”と肯定的に評価し、その父親から“育児サポートが得られている”と母親が認知するということが、母親の精神的健康に影響を与え<sup>10)</sup>、育児負担感の緩和に影響すると考えられた。

## V. 結 論

育児期における父親の特性としての父親の親性は、「夫婦の関係性」、「父親としての自覚」、「児への親愛性」の3因子であった。父親の親性が高くなることにより、母親は父親からの育児サポートを認知し、その認知を介することで育児負担感の緩和に影響した。

## VI. 研究の限界と課題

本研究の対象は、育児負担感を強く感じているとは言いきれない集団であり、母親の仕事の有無や父親の職種やワークライフバランスなど、父親を取り巻く幅広い生活環境までを考慮した分析は課題が残った。今後は、母親の育児負担感が要因となる不適切な育児や虐待を予防する観点から、3歳児の養育者全般にも適用できるよう検討していきたい。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 第4回全国家庭動向調査(2008年社会保障・人口問題基本調査).
- 2) 桑名行雄, 桑名佳代子. 1歳6カ月児をもつ父親の育児ストレス—親役割認知及び性役割態度との関連—. *こころの健康* 2006; 21: 42-54.
- 3) 内閣府. 平成25年度版子ども・若者白書. (平成26年4月30日アクセス可能) [http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf/b1\\_05\\_02.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf/b1_05_02.pdf); 49-50 [http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf/b2\\_04\\_04.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf/b2_04_04.pdf); 184-185
- 4) 山野則子. 「育児負担感と不適切な養育関連モデル」の実証的研究—共分散構造方程式モデリングによる分析—. *梅花女子大学現代人間学部紀要* 2006; 3: 25-32.
- 5) 牧野カツコ. 乳幼児を持つ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—. *家庭教育研究所紀要* 1985; 6: 11-24.

- 6) 金岡 緑, 藤田大輔. 乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に関する否定的感情の関連性. 厚生 の 指 標 2002 ; 149 : 22-30.
- 7) 五十嵐久人, 飯島純夫. 父親の育児参加への意識と育児行動. 山梨医大紀要 2001 ; 18 : 89-93.
- 8) 中添和代, 舟越和代, 白石裕子. 働く母親の育児不安—夫の育児サポート意識との関連—. 地域環境保健福祉研究 2003 ; 6 : 39-46.
- 9) 岡本絹子, 中村裕美子, 山口三重子, 他. 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. 小児保健研究 2002 ; 61 : 692-700.
- 10) 岡田節子, 荒川裕子, 種子田 綾, 他. 母親の育児負担感と精神的健康の関連性. 静岡県立大学短期大学部研究紀要 2003 ; 17 : 115-126.
- 11) 中嶋和夫, 桑田寛子, 林 仁実, 他. 父親の育児サポートに関する母親の認知. 厚生 の 指 標 2000 ; 47 : 11-18.
- 12) 田中恵子. 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. 人間文化研究科年報 2010 ; 25 : 215-224.
- 13) 中山美由紀, 三枝 愛. 1歳6カ月児をもつ母親に対する父親の育児支援行動. 母性衛生 2003 ; 44 : 512-520.
- 14) 宮木由貴子. 父親の子育てに関する一考察～30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識～. ライフデザインレポートスプリング 2014 ; 4 : 28-35.
- 15) 高橋道子, 高橋真美. 親になることによる発達とそれに関わる要因. 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系 2009 ; 60 : 209-218.
- 16) 菊池ふみ. 父親の育児2—育児経験と父親の発達—. 文京学院大学紀要 2008 ; 10 : 99-120.
- 17) 島崎志歩, 田中奈緒子. 父親の生活実態と発達—就労・家庭状況, 子育て関与との関連—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 2007 ; 10 : 109-117.
- 18) 田村 毅, 倉持清美, 岸田泰子, 他. 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (8) ～男性の子育て参加～. 東京学芸大学紀要6部門 2004 ; 56 : 41-45.
- 19) 山西裕美. 父親の子育て参加規定要因についての研究—両親の就労形態との関連で—. 社会関係研究 2011 ; 16 : 59-89.
- 20) 根本さや香, 新山陽子. 父親の愛着形成の促進—ベビーマッサージの効果—. 母性看護 2008 ; 39 : 108-110.
- 21) 尾形和男, 宮下一博. 父親の協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達および父親の成長. 家族心理学研究 1999 ; 13 : 87-102.
- 22) 及川裕子. 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌 2005 ; 5 : 81-91.
- 23) 森永裕美子. 父の親性(親であること)と母の育児負担感に関する研究. 小児保健研究 2010 ; 69 : 645-656.
- 24) 桑名佳代子, 細川 徹. 1歳6か月児をもつ親の育児ストレス (1) —母親の育児ストレスと関連要因—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2007 ; 56 : 247-263.
- 25) 桑名佳代子, 桑名行雄, 細川 徹. 1歳6か月児をもつ親の育児ストレス (2) —両親間における育児ストレスの関連—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2008 ; 57 : 339-358.
- 26) Richard S Lazarus, Susan Folkman (本明 寛, 春木 豊, 織田正美監訳). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—. 第1版(第2刷). 東京:実務教育出版, 1991.
- 27) Heaman DJ. Perceived stressors and coping strategies of parents who have children with developmental disabilities. A comparison of mothers with fathers. Journal of Pediatric Nursing 1995 ; 10 : 311-320.
- 28) 及川裕子. 親性の発達尺度の作成を試みて. ウーマンヘルス学会誌 2005 ; 4 : 93-102.
- 29) 岩田裕子, 森 恵美, 前原澄子. 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. 日本看護科学学会誌 1998 ; 18 : 21-36.
- 30) 中嶋和夫, 斎藤友介, 岡田節子. 母親の育児負担感に関する尺度化. 厚生 の 指 標 1999 ; 46 : 11-18.
- 31) 小塩真司. 研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析. 第1版. 東京:東京図書株式会社, 2005.
- 32) K市平成22年国勢調査結果統計表—職業等集計表—抽出詳細集計(平成26年4月30日アクセス可能). <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?itemid=48576#itemid48576>
- 33) 厚生統計協会. 国民衛生の動向, 厚生 の 指 標 増刊. 東京:厚生統計協会編, 2013.

- 34) 多賀 太. 仕事と子育てをめぐる父親の葛藤—生活史事例の分析から—. 国際ジェンダー学会誌 2007 ; 5 : 35-61.
- 35) 佐々木裕子. はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因. 母性衛生 2009 ; 50 : 413-421.
- 36) 大橋幸美, 浅野みどり. 育児期の親性尺度の開発—信頼性と妥当性の検討—. 日本看護研究学会雑誌 2010 ; 33 : 45-53.
- 37) 小笠原百恵. 親になった男性の「親性」に関する文献研究. 関西看護医療大学紀要 2010 ; 2 : 11-21.
- 38) 田中美樹. 「父親になった」という父性の自覚に関する研究. 母性衛生 2011 ; 52 : 71-77.
- 39) 三上知美, 掛谷益子. 母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究. インターナショナル Nursing Care Research 2011 ; 10 : 75-83.

#### [Summary]

The aim of this study was to clarify the fatherhood of a father with a 3.5-year-old child, and whether it had an influence on the mother's psychological childcare burden

through her recognized childcare support.

A questionnaire survey was conducted with parents of a 3.5-year-old child. Exploratory factor analysis was performed on data collected to investigate content validity, and confirmatory factor analysis and structural equation modeling were used to evaluate construct validity.

As a result, fatherhood consisted of 3 factors with 11 items : husband-wife relationship (5 items), self-awareness (4 items), affection to his child (2 items). It was also found that fatherhood influenced the mother's psychological childcare burden through her recognized childcare support.

---

#### [Key words]

fatherhood, father self-awareness,  
husband-wife relationship,  
mother's recognized childcare support,  
mother's psychological childcare burden